

随 感



足るを知らず

附属さいたま医療センター長

川 上 正 舒

平成21年も暮れようとしている。さいたま医療センターは平成元年に開設されたので、まさに平成という年号とともに歩んできた。元年の12月に診療活動を開始し、この12月で丸20年を完了することになる。10年一昔とすれば二昔も経たことになり、激動とも言える開設当時の数々の出来事もセピア色の記憶へと変化しつつある。本学の1期～3期の卒業生が中心となり、それまでの僻地での医療活動の経験を生かして総合医療を確立し、総合医の育成と地域医療の拠点となる自治医科大学の新しい附属病院を創設しようという意欲に満ちた門出であった。一方で、循環器を中心とする超専門家集団があり、その両者の共同による高度の総合医療の実践という高邁な理想を掲げ、「病気をみずして病人を診よ」(高木兼寛)を越え「病人も病気もしっかり診よ」を目標にした当時の大宮医療センターは、それがわずか6診療科、85病床であったと言われると俄かには信じられないほどの希望と熱気に溢れていたように思えてくるのは年寄りの感傷であろうか。現在の16診療科、608病床をあのエネルギーで運用するとすれば空中分解をすることも考えられ、そこが組織というもの難しさであるように思う。

懐古の感傷はさておき、以来、さいたま医療センターは「総合」と「専門」の融和を模索しつつ毎年のように増科、増床を重ねてきたが、今年もまた更なる跳躍を求められる年であった。その中で最も大きな課題は周産期医療である。実質的には昨年10月より、産科はもとより1500g以上というしばりはあるものの新生児医療も開始し、獅子奮迅とも言える活動を実践している。しかし、残念ながら、この実績は協力体制にある埼玉県立小児医療センターの医師などごく一部の関係者以外には知られておらず、地元住民や医師会のお歴々には十分に認識されるには至っていないらしい。埼玉県議会を含めて当センターの周産期医療の早期の開始を要望する声には不満、時には批判も混ざようになってきている。とにもかくにもNICU (Neonatal Intensive Care Unit) として来年5月には公示できるように関係諸氏をお願いしているところである。

そのNICUは、正に「総合医療」そのものではあるが、私が多少は関わってきた成人の医療とはかなり異なる世界のようにお見受けする。私は、現在どの程度までの未熟児を成人にまで成長させることが期待されているのかを熟知しているわけではないので的外れであるかも知れないが、医療技術としては大変に進歩しているようである。一昔前までであるならば“生後間もなく”を天寿とされたかも知れない超低出生体重児の多くが立派に成長することを期待される世の中になってきた。掌の中に包み抱えられるくらいの小さな児でも育つということは驚異であるが、

一方では、親もまた医療スタッフも長期にわたり非常に大きな労力を要求されているということは、医療関係者の間でも実感として理解していない人が少なくないと思われる。また、その中には軽視できない障害を終生担う児がいることも事実であり、このような場合は、ある時点で“天寿を全うした”として納得せざるを得なかった時代の方が「自然の法（おきて）」に対して素直であったのではないかとの疑問もわいてくる。NICUに限らずこのような極限の医療というものには複雑な問題が含まれているように思う。「足るを知らない」人間の欲望が医学を含めた科学の進歩の原動力となっていることは事実であるが、このような医療の進歩というものがどこまで行くのか、また、どこまで行くべきなのかということについて漠然とした不安を覚えることも正直なところである。臓器移植やクローン人間の可能性に驚いてから既に久しく、最近はiP細胞の臨床応用の可能性についての議論が盛んである。また、娘さんの卵子を用いた実母の代理出産というニュースにも技術としては驚かなくなってきた。テレビカメラの前に立つ嬉しそうな娘さんと、代理母を努めたその母親の誇らしげな顔をみると、「おめでとうございました」ということと同時に、人間の欲求は、しばしば自然の法を超えるのではないかということを考えさせられる。このように科学技術が人間としての生命の誕生ということにまで介入できるということを見聞するにつけ、良い悪いを超越して、これほどの強い欲求をもつ人間の医療に関わっていることに一抹の不安と寂寞とも言える感情に襲われる。それは、おそらく、私が「自然の法」と科学の関係を理解していなことになるのであろう。もっとも、William Oslerが「臨床医学は、科学に基礎を置く技術である。-----、それは、天文学や工学のように理路整然たる法則を持った、正真正銘の科学といえる粋にはまだ達してはいないし、おそらく今後も達することはないだろう。」（日野原重明、仁木久恵 訳、平静の心。医学書院）と言うように、私だけが理解できないのではなく、臨床医学と科学の関係の宿命なのかも知れない。また、Oslerは（医療に携わる者の努めは）「自然の法則を大衆に教える役」とであると述べているが、一方で「――未だに自然の真の姿を正確に把握してはいない」とも言っている。Aldous Leonard Huxley（Andrew Fielding Huxley;神経活動電位の研究で1963年ノーベル医学生理学賞の兄, Thomas Huxleyの孫）がBrave New World（Penguin Readers. Pearson Longman）を書いたのは1932年である。生殖とは無縁のフリーセックスの一方で、子供は「Hatcheries and Conditioning Center（中央孵化・条件反射育成所）」において人工授精、人工胎盤により育成され、社会の需要に応じた能力の人間を自在に創造するという社会を描いたものである。大学1年の時に読んだ小説で、1960年代当時は出版後30年を経っていたが、それでも奇想天外に感じたものである。しかし、その後40年以上を経た今日の生殖科学の現状を垣間見るにあながち非現実的とは言えなくなってきたのではないだろうか。このようになってくると、例えば臨床医学が“正真正銘の科学に達した”としても、医師の役割が「理路整然たる自然の法を大衆に教える」ことになるのかどうかは私にはおぼつかない。

中国には古くから仙人思想というものがあるそうである。その頃の人間の最大の欲望は「不老長寿」であり、この欲望を肯定し、不老不死を得ることが至上の道と考える思想だそうである（「生きる糧となる医の名言」荒井保雄著、中央公論新社）。NICUはこの最大の欲望を満たす最も初めの医療行為となるのであろうが、人間の欲望とそれを追求する人間の知恵の追いつきを「自然の法」を無視しようとしているようにも感じる凡人の私としては、自分の人生を含めて「そろそろ足るを知」っても良い時期かも知れないとも思うようになってきた。「総合医」とは何か、「専門医」の役割は何かという激しくもあった20年前の当センターでの議論の日々を懐かしむような齢になったということは、傍に晋ドンは居ないけれども、私もそろそろ「もう、ここいらでよか」ということなのかも知れない。